

ことは、芭蕉の全作品を通じて、西行の影響がありそうだと思われる個所が他の「古人」或は「古文学」の影響をうけていると思われる個所より目立つて多いということ、また、前述したように、何でも西行と名のつくものは、その真偽もたしかめずに盲目的に信じこみ、それに随うというような、盲信随順の態度となつてあらわれていることによつてもうなづけるのである。

第二に、芭蕉は自分の作品に、西行の和歌の言葉を用いたり、西行の和歌に胚胎したり、或は換骨したりする態度をとつている。この例は非常に多くみられるが、最初、西行の字句をそのままとり入れていた事から、だんだん發展し、西行の歌の意味情趣を生かしながら、西行の和歌から離れても完全に句意を独立させるに至つている。

このことは、新古今集以来の本歌取りの歌などとは異つていふところであつて、芭蕉が如何に西行の和歌に對して、その消化力が大であつたかがわかるのである。つまり、芭蕉の句の背景となつてゐる西行の和歌は、ある時は連句における前句の役目をしてゐるとも言えるのである。そして、それは、おもかげとなつて動いたり、にほひとなつて漂つたり、ひびきになつて力をひびかせてゐるとも言えるのである。しかしながら、最初からこうあつたのではなく、やはり初めは和歌のとおり方が、縫い目の見えない渾成体とはちがつていて、そのとつて来た原形のと見えるものがほとんどである。それは、古歌の一部一句をそのままたくみにとり入れてはいるのであるが、完全に消化されてゐないのである。例えば、

命なりわずかの笠のした涼み

露とくくこゝろみに浮世すゝがばや

雪ちるや穂屋のすゝきの刈り残し

落ちくるや高久の宿のほとゝぎす

しら菊の目にたてゝみる塵もなし
などの句である。

第三に、芭蕉は西行の心を心として新しい展開を示す態度をとつたのである。つまり、西行の和歌をとり入れるについても、その和歌のこゝろ（和歌の意味）をとつてゐる。そして、和歌的なものから近世の俳諧的なものへと変えて行つたのである。例えば、

原中や物にもつかず啼くひばり

山寒し心の底や水の月

鯛よりは海苔をば老の売りもせて

などの句である。これらは、完全に句意も独立してゐて、芭蕉のものとして感ぜられるのであつて、芭蕉の文学的芸術として後世に伝わるところの業績となつてゐるのである。

以上三つにわたつて、芭蕉の文学における西行の投影をみるのであるが、芭蕉が生命における重大な課題として、出家・隠棲・漂泊等を早くから内省したであらうことは容易に推察出来るし、西行敬慕の契機もそこにあつたとみてよいと思ふのである。

(水俣第一中学校勤務)

「もみぢ」考

…万葉集と八代集を資料として…

原 田 順 子

万葉集に於ける「もみぢ」の用例を調査するに、「紅葉あるいは「赤葉」の二通りの区別がある。そこで第一の問題として、「黄葉と紅葉」の区別について検討してみたいと思ふ。先ず次の表は、万葉集に於け

る「もみぢ」の総数を、その用字法別に調査し表したものである。

第一表

もみぢの總數	九五例
黄葉	八二例
赤葉	三例
紅葉	一例
毛美知	九例

一見して我々は意外に思われることは、今日のそれとは逆に、「黄葉」の用字法が圧倒的に多いことがわかるのである。さて総數九五例中黄葉が八二例、赤・紅葉が三例、紅葉一例となつてゐるが、これらは、どの様な意味を含んでゐるのであろうか。今試みにこの四例を例外として詳細に眺めて行きたいと思ふ。

卷十・二二〇一

妹許跡馬鞍置射駒山擊越來者紅葉散筒

卷十・二二〇五

秋芽子乃下葉赤荒玉乃月之歴去者風疾鴨

卷十・二二三三

秋山之木葉文未赤者今且吹風者霜毛置応久

卷十三・三二二三

露瀼之日香天之九月之鐘礼乃落者鶉音文未來鳴神南備乃清三田屋
乃垣津田乃池之堤之百不足三綱披丹水披指秋赤葉……。

以上四例を諸註釈によつて参考としたのであるが、いずれも疑問として取り上げてはゐるが、それに対する意見、解決は少しも述べられ

ていない。つまり左註、作者不詳である為に、年代、場所、その他見当が付き兼ねるのも当然と云えよう。こゝで唯一つ最も重要な手懸りとなるのは、卷十に三例もの赤・紅葉・紅葉が詠まれていることである。そこで卷十の一首一首の性質、そこから生じる全体の性質をくみ取らなければならぬが、時間不足の為次の機会に譲ることにする。しかし同巻には長、歌三首、短歌五百三十二首、旋頭歌四首となつて短歌が圧倒的數を示している。しかも短歌にしても優美・繊細な作が多く見うけられる。中には人麿の作らしきものもあるが、人麿と長歌との關係は申すまでもない。又一方において想像されることは、短歌と家持との關係をも見逃せない。人麿の素材な作風に反し、家持の優美・繊細な作風と云われているところからして、この巻十は万葉集の中でも比較的新しく、むしろ古今集との關係がある様に思われる。今述べて来た事柄は、私の單なる推意によるもので、まだまだ研究すべき点が多々ある事と思ふ。ところで四例中一例残されていた卷十三について検討しなければならぬが、この巻は、卷一・二と同様最も古いと云われている。そこでこの卷十三に関して特に調査・検討をして行くことにする。しかしその前に少し触れておきたい事は、「もみぢ」とは一体どうゆう意味をもつてゐるのであろうか。品詞別にして、「名詞」と「動詞」の二つの意味を持つてゐるのであるが、いずれにしても、「もみぢするもの」(私は以後それを対象物と呼ぶ)があるわけである。

第二表

各數	もみぢの對象物	楓	芽	梨	野	社	紀	不	總
1	4	2	1	3	1	3	1	1	1
1	2	1	1	1	1	1	1	1	42
1	3	1	1	1	1	1	1	1	14
1	2	1	1	1	1	1	1	1	95

この表は、「もみぢ」の総数におけるその対象物を表にしたのであるが、楓、芽子、梨、楓、は草木花として、対象物が明らかかなものでそれ以下は莫然としている。ことに山は四二例もあつて全く想像さへ不可能である。僅か四例にて云々することは危険な事ではあるが、不思議にもこの四種とも赤くもみぢするものでなく黄くもみぢするものに限つている。となると当時は、黄色にもみぢする対象物に限つて「もみぢ」と云つていたのではなからうか。となるわけであるが、しかし万葉植物考(豊田八十代著)並びに万葉集大成8の万葉集の植物(小清水氏)を参考しますと、すでに同時代に梓、榊、楓等、赤くもみぢする花草木が存在していたことが明らかにされている。存在していた以上、全く詠まれなかつたとも考えられない。こゝに卷十との密接な關係が生じて来るのである。黄葉・紅葉の区別について、対象物から検討して来たのであるが、こゝで「もみぢ」の語源について調査したのであるが、大言海によると「もみぢ」の語源は、「揉み出すこと」となつて色には何の制限もないのである。黄変する対象物、赤変する対象物が共に存在していた以上共に詠まれるのも当然であるが、要は何故黄葉という用字法を圧倒的に多く詠んだかが問題となるわけである。

前にかえて卷十三の「赤葉」について検討してみたい。以前からこの歌に関しては非常に難解とされて来ているが「赤葉」もその一つである。即ち諸註釈によると「赤葉」の対象物に二説がある。

第一説 楓がもみぢする……略解・古義・繙釈・

第二説 楓と異なる木が赤葉する……全釈・全註釈・

この二説の方は楓が赤葉する事はあり得ないことで黄葉するものとされているところからその矛盾を除くために楓に他の枝(赤葉した)がさしかわしていると説いたのである。妥当の様に考えられるが、この問題については、今少し「水枝指」の語について調査・検討する

必要があらう。第一説にしても、ことに略解・古義と比較的古い説が賛成していることは捨て難い意見である。そのいずれが正しい説かは私には断定出来ないものであるが、私は第一説に賛成するものである。

これについて私の考えは余りにも詮索し過ぎた考えかもしれぬが次の様に解するのである。先ず五十桐枝丹に於ける「丹」の問題である。

この「丹」には、「助詞」の他に「名詞」があることは例の奈良の枕詞としての「青丹吉」についても明瞭な事である。つまり青色に対して丹色を用いた名詞用法である。この歌の場合、助詞「に」は「爾」でもよさそうである。少くとも「丹」を用いたのは作者の色のコントラストを意識しての漢字に対する深い知識から表現せられたものと考えるのである。この名詞的用法「丹」から連想して次になる「もみぢ」を「赤葉」という用字法をとつたにすぎないのではなからうか。この様に考えれば、赤葉は単に作者の技巧から発した表現法であり、やはり作者は楓の黄色にもみぢすることを歌つたのではなからうかと云う解釈が妥当な解釈ではなからうかと思ふのである。赤くもみぢする対象物その他の積極的理由のない限り万葉集に於ける用字法に基づいたものと思われる。その用字法と云うのは、「赤葉・紅葉」と書かれてあるからして、その対象物がかならずしも「赤くもみぢする」とは限つていないということである。

以上卷十三・前述した卷十について、「赤・紅葉の四例について調査し、検討して来たのであるが、結論を見出す迄には至らなかつた。

次に、「黄葉と紅葉の区別について」の参考資料として、「万葉植物と古代人の科学性」(小清水卓二著)の一部をこゝに引用すると「……一般に紅は文化の度の低い民族に特に好まれる色であるので、万葉人の高級な心理作用で特に黄葉を対象としていたのかもしれぬ」と氏は述べておられるが、私は当時の色感に着目し、当時、彼等の非常に関

心を払つていたと思われる日常生活に於ける着物、内でも着物の色（色によつて身分、地位が区別せられていた）について少しばかり資料も集め、考察して見たのであるが、こゝでは紙面の都合上省略する。

第三表

第二期	第三期	第四期	作者不詳
大津皇子 1	縁達師 1	六 六 1	
藤原朝臣 1	山前王 1	久米女王 2	
穂積皇子 1		大伴家持 6	
長屋王 1		中臣清麿 1	
山部王 1		市原王 1	
柿本人麿 2		長忌寸娘 1	
		三手代人麿 1	
		大伴池主 1	
		池邊王 1	
		大伴書持 1	
計 7		16	46

この表は奈良時代を四期に分け、もみぢの総用例中、明記された作者名を表にしたのであるが、この表に出て来る人物は、比較的身分・地位の高い人々であり、しかもそれらの作者の歌は、いずれもその用字法は「黄葉」となり「赤葉」の例は一例もないのである。そこで、かならずしも身分・地位の低い人が「赤葉」を用いたとは断定出来ない。

いのであるが、小清水氏の述べられた如く、「……万葉人の高級的心理によつて黄を対象としていた……」という意見は、第三表からしても私は妥当な考え方であろうと思うのである。但し氏の「紅は一般に文化の度の低い民族に特に好まれる色である……」は、現代の考えに基ずくものであろうと考へ、はたして当時としてはその様なことが云えるかどうか疑問である。

ところで今迄は万葉集による「もみぢ」に限つて述べて来たのであるが、それは奈良時代に於けるものであつた。次に時代的変遷をたどつて見るのも興味深い問題であり、これから八代集を資料として、平安時代と対比しながら考察して行くことにする。第四表でわかる様に「もみぢ」の用例において平安前期に増加されていることが一目される。そこで第二の問題として古今集・後撰集に於ける「もみぢ」が多く用いられていることに關して一考察をしたいと思ふのであるが、これから述べることは、「もみぢ」の用例にもとづく調査の結果を表にし、報告したに過ぎぬかもしれぬ。

第四表

%	もみぢ	總數	葉集						
			万葉集	古今集	後撰集	拾遺集	後撰集	詞集	千載集
一・三	五〇	四五六二	四五六二	四二六二	三三〇	七六	四二二	二八五	一九七九
三・六	四二	四六三	四六三	三三〇	七六	四二二	二八五	一九七九	
二・五	四六	三三〇	三三〇	七六	四二二	二八五	一九七九		
一・四	一九	一四一	一四一	七六	四二二	二八五	一九七九		
一・二	一四	一四一	一四一	七六	四二二	二八五	一九七九		
一・九	一四	一四一	一四一	七六	四二二	二八五	一九七九		
二・一	六	二七三	二七三	七六	四二二	二八五	一九七九		
一・三	三	二二二	二二二	七六	四二二	二八五	一九七九		

右の表は「もみぢ」の秋の部に限つての用例を万葉集と八代集とによつて比較したのであるが、この表から古今集・後撰集に急に多く詠まれていることが一見してわかるのである。次に「もみぢ」の総数から調査すると、

第五表

	万葉集	古今集	撰集	遺集	拾遺集	葉集	花集	載集	古今集
總數	四五六二二	四四三三	三三三三						
もみぢ	九五	五五	六六	三三	三三	三三	三三	三三	三三
%	二・一五〇	四・六二三	二・五三三	三・三二二	二・七五二	二・五七二	二・五二四	二・五二四	二・五二四

この表からも、比率からして万葉集に比べて古今集後撰集は二倍以上に増加している。又こゝで時代的変遷をみるに、平安時代を前期と後期に二分して、前期を古今集から拾遺集迄、後期を後撰集から新古今集迄とする。

第六表

	奈良時代	平安前期	平安後期
總數	四五一六	三八八八	五六一六
もみぢ	九五	一五二	一四八
%	二・二	三・八	二・六

この表から用例数からしても百分率から見ても平安前期に多く詠まれていることは、万葉人に比べて平安時代の人々は「もみぢ」に関心を持ち、「もみぢ」を好んでいたに違いない。これら多く詠まれた理由については、多方面から検討を要するのであるが、私は今までの主に用字法からの調査・研究による立場から理由の一つとしてこゝでも用字法を問題とするのである。

第七表

	古今集	撰集	遺集	拾遺集	葉集	花集	載集	古今集
紅葉	19	28	19	11	7	5	17	10
もみぢ	18	13	0	3	7	1	5	4
黄葉	0	0	0	0	0	0	0	0

右の表をみるに、その用字法からして万葉集に於ては、黄葉が圧倒的な数字を示していたのに、八代集に於ては一例も黄葉が見あたらない。反対に万葉集には、赤葉三例、紅葉一例であつたのが、八代集では赤葉は一例もなく、一例にしか過ぎなかつた紅葉が多く用いられたことが注目される。一方、平仮名で「もみぢ」と書かれている中には当然その対象物が黄色にもみぢするものと取れる歌があるが、これに關しては用字の面だけでなく内容の面に於ても關係があるのであつて、こゝでその内容の面に少し触れてみよう。先に述べた様に、八代集において紅葉が多く歌われる様になつたとはいへ、まだまだ黄色にもみぢするものを歌つてということが知れるというのである。第二表に於ける対象物の表と同じ様に八代集に於ても明記された対象物に限つて詳細に比較・検討してみよう。

第八表

	万葉集	古今集	撰集	遺集	拾遺集	葉集	花集	載集	古今集
月の桂	1	1	1						
芽子	4								
梨	2								

榎	葛木	女郎花	柞	楓	橙	柏木	檣	薄	松	箒木
	1	1	3							
					1	1				
				1	1	1	1			1
			1							
			3						1	

右の表を見ると、古今集・後撰集迄は黄色くなる「もみぢ」、赤色になる「もみぢ」が歌われているが、拾遺以下は赤くなるもみぢに固定化されていて、その紅葉の対象物はすべて紅（赤）にもみぢする花草木である。つまり古今集・後撰集はその過渡期にあたっていたわけで、黄色くもみぢするもの、紅にもみぢするものと、いずれかの固定もなく動的に共に同時に詠まれたに外ならないと考えるのである。

最後にもみぢの多く用いられている第二の理由として、秋の七草と「もみぢ」について比較してみよう。

第九表

すると、

第十表

總計	葛花	朝顔	藤袴	女郎花	尾花(薄)	撫子	芽子	もみぢ	葉集 古今集 後撰集 拾遺集 拾遺集 金集 花集 載集 古今集
130		1	1	15	19	30	66	50	萬葉集
44			3	18	6	2	15	41	古今集
49		2	1	17	8	6	15	46	後撰集
42		1	1	10	5	3	21	19	拾遺集
47	1	2	9	6	2	3	24	14	後撰集
16	1		4	7	2		2	14	金集
15		1	1		2	2	9	6	花集
16				3	1		12	27	載集
28		1		5	8		14	22	古今集

右の表を「もみぢ」と「秋の七草の総数」に於てその百分率を比較すると、

秋の七草	もみぢ%	萬葉集	古今集	後撰集	拾遺集	拾遺集	金集	花集	載集	古今集
二・九	一・三	二・九	三・六	四・〇	三・五	三・二	三・九	二・二	三・六	一・二
四・〇	二・五	一・四	一・二	一・九	一・四	二・一	一・三	二・一	一・三	一・三

この表で明らかにされることは、万葉集に於ては、「もみぢ」よりも「秋の七草」が比率からも二倍もの高い率を示しているし、古今集・後撰集に於てはその比率の差は余りないことである。又第九表を参考にすると万葉集に於ては「もみぢ」よりも芽子をはじめ秋の七草がその用例数に於ても多く詠まれ古今集・後撰集に於ては逆に秋の七草

が「もみぢ」に比べて少く詠まれていることがわかるのである。以上二つの理由から多く詠まれた事に關して考察して来たのであるが、解決に至る迄にはあらゆる角度からの調査が必要とされて来るのである。

最後に結論を述べるわけであるが、私の場合、問題解決による結論ではなく、結論を導き出すまでの過程における調査の結果を中間報告したに過ぎない。第一の問題として「黄葉と赤葉の區別について」に問題をしぼり検討してみたのであるが、その區別と云うのも用字法から来たものである。しかも用例をみると「黄葉」が八二例、「赤(紅)葉」が四例となつて圧倒的に黄葉が多く用いられている。それは何故であろうか。これがこの問題の最終の目的であるが結論には至らなかつた。こゝで用字法の問題に入る前に一体「もみぢ」の語源は何であろう。大言海によると「揉み出す」となつていて、色に制限はないということがわかつた。そこで当然黄葉でも赤(紅)葉でもよいのである。しかるに私の調査した「もみぢ」の明確な対象物をみると皆黄色くもみぢするものばかりであつた。一方、万葉植物考をみると当時すでに赤くもみぢするものが存在していたことが明らかにされた。そこで赤葉も黄葉と同様多く詠まれてよさそうである。こゝにおいて赤(紅)葉の四例を如何に解したらよいであろう。この四例中三例は卷十の中で詠まれ、他の一例は卷十三に詠まれたものである。卷十三については万葉集に於ける特殊な用字法に類似した用い方として、この作者は恐らくは穂の黄葉を詠んだのであらうとした。又卷十については先ず卷十の性質から調査・検討しなければならぬが、今の段階では何も云えないが唯、私自身の解決策として、家持と卷十の關係から万葉集でも新しく、私はこの三例は万葉調の作り古今詞に近いものであらうと想像するのであつて、むしろ古今葉との関連によるこの方面からの赤(紅)葉の解決が必要ではなからうかと考へるものである。

一方圧倒的數を示す「黄葉」について、その中で明記された作者名をみると、すべて身分・地位の高い人々である。又「赤葉」を詠んだ歌は皆作者未詳である。この事は作者が身分・地位の低い為、名を記さなかつたと見ることが可能であるかどうか。いづれにしても小清水氏が云われた「万葉人は高級心理によつて黄色を対象としていた」と述べられたことは妥当な意見であると思ふのである。

第二の問題として「もみぢ」が古今集・後撰集に多く詠まれていることに關して一考察をしたのであるが、万葉集と比較しながら八代集を資料としてその用例にもとづいて調査検討してみた。そこで平安前期に多く詠まれた理由について二つの理由を表から考察して行つたのである。第一の理由は「もみぢ」の用字法から見ても、古今集・後撰集では、「もみぢ」と平仮名で書いてあつても、その対象物の中には黄色にもみぢするものもあり、又万葉時代に於て一例にしか過ぎなかつた紅葉が多く詠まれる様になり、同時に黄葉・赤葉(紅)が詠まれたことにならう。第二の理由として「もみぢ」と「秋の七草」について用例を比較してみると、万葉集では「もみぢ」に比べて「秋の七草」が多く詠まれ、古今集・後撰集になると、その逆の事が云える。つまり万葉人に比べて平安前期の人々は、「もみぢ」を他の花よりも好んで歌つたことがわかるのである。

以上、第一の問題にしても第二の問題にしても何故万葉時代では「黄色」を多く用い、何故平安前期では「もみぢ」が多く詠まれたかが私の今後の研究課題であり、その目的達成の為に一層の研究・努力をしたいと思います。